

【2021 年度教職 FD プロジェクト報告】

研究テーマ

学校教育の現代的課題への取り組みと 教員養成に係る調査研究 3

－国際バカロレア日本語 DP 認定校（名古屋国際学園）訪問調査－

研究代表者：滋野 哲秀（文学部）

共同研究者：多賀 優（農学部） 長嶺 寿宣（国際学部）

I はじめに

本学教職センターが去年度から取り組んでいる国際バカロレアの調査（FD プロジェクト課題）の一環として、本年度は3校を訪問した。本稿はそのうちの1校である学校法人名古屋国際学園（Nagoya International School；以下、NIS）の訪問調査に基づく報告である。

II NIS の概要

NIS は 1964 年に設立され、国際的な教育機関である米国西部地域私立学校大学協会（Western Association of Schools and Colleges）や国際学校協議会（Council of International Schools）の認可を受けている。また、愛知県内で唯一、国際バカロレア機構の全課程（初等教育プログラム、中等教育プログラム、及びディプロマ・プログラム）の認定校となっており、3歳のプリスクールから高等部までの生徒約400名を対象に、約60名の教師が全ての授業を英語で行っている。高等部卒業時には、アメリカのハイスクール卒業と同等の資格が得られるほか、国際バカロレアの統一試験を受けることにより一定の成績を収めれば、ディプロマ（大学進学のための国際バカロレア修了資格）を得ることが可能である。

2020年にコロナ禍の中で工事が行われた新しい校舎の玄関には、生徒に求められているスピリットを示す「Inquire, Inspire, Impact」という3つの言葉とともに、①To achieve our mission, each student will articulate their dreams and creatively engage in activities

toward achieving them. ②To achieve our mission, each student will demonstrate the confidence and desire to continually question and expand their knowledge, skills, and understanding. ③To achieve our mission, each student will choose to consistently contribute to their communities. という学校が教育目的を達成するために生徒に求める具体的な行動が掲げられていた。理系の新しい校舎も設置され近代的な趣のあるキャンパスで、授業や各種の活動が活発に行われていた。

以下、内容別に章立てし、適宜、当日ご対応いただいた渉外開発室長のオルソン・キクチ・エリック

氏及び MYP (Middle Years Program; 11 歳から 16 歳までの教育課程) コーディネーターで数学教師を務めるグッドマン・ピート氏の説明や、個別にインタビューした生徒から得た情報をまとめる。



図1 生徒の行動目標

Ⅲ 訪問調査の成果：NIS の教育の特徴

1 アートのクラス

訪問時には、小学生の教室用ロゴ（クラスの identity を示すもの）のデザインを製作する活動が行われていた。教室前方には、ロゴの作成に関わる評価基準（rubric）が提示されていた。生徒たちは一人一台のノート型 PC で、ユニークなイラストを描画し、ロゴとして加工編集したものをお互いに評価（peer review）し終えた段階にあった。各自がクラスメイトからもらったフィードバックを参照しながら、「どこを」「なぜ」「どのように」修正すべきなのか、慎重に検討することが求められていた。生徒同士のロゴの評価は、あらかじめ設定された評価項目を意識して行われたもので、完成品に求められる質を見据えた上でフィードバックが交わされており、学習の成果物（完成させるロゴ）の質のみならずプロセス（完成に至るまでの過程）が授業の中で可視化されていた点が注目に値する。

2 数学のクラス

数学の授業では、レクチャー主体の一斉指導が終わり、生徒たちは Google Classroom

で事前に出された課題に取り組んでいた。教科書を開いて公式等を確認しながら作業に取り組む者、ノートの書き込みをクラスメイトと共有し議論しながら作業を進める者、教師に質問し個別の助言を求める者など、個々の習熟レベルに合ったペースで学習が進められていた。学期途中から入学した生徒が一名おり、クラスメイトとの教え合いと教師による机間指導が効果的に機能していた。レクチャー一辺倒の授業ではなく、授業の大半が個々のプロジェクト（タスク等の探究型課題を含む）への支援を中心に展開するため、学習の個別化が重要でありまた不可欠であると認識されていた。また、これは数学の授業に限ったことではないが、問題を考え導き出した解答よりも、解答に至るまでの経緯（試行錯誤のプロセス）と、生徒が援用した様々なアプローチや手法などを可視化し、教師がそれらを適切に把握した上で公正に評価することが肝要であると捉えられていた。学習への取り組みとその成果を評価するための評価基準が明確に示され、生徒が常に意識できる状態で授業が展開されていた。先述の解答に至る経緯や、援用されたアプローチなども評価項目に含まれていた。学習の個別化を図ると、教師の目が届かないところで生徒の怠慢が見られがちだが、参観した授業ではその傾向が見られなかった。全ての授業において到達目標と評価基準が明示され、生徒と教師との間で授業と評価に関わる合意形成がなされていたことが理由として考えられる。加えて、知識の教授偏重型の教育を否定し、教員組織が一丸となって新たな「知」を創出する力の育成に取り組んでいた。「知」の創出に必要なメタ認知能力の伸長・活用を重視する一端は、複数の教室に掲示されていた、学んだ知識・技能の活用・応用方法を図示したポスター（「Learning How to Learn」）にも見ることができる。

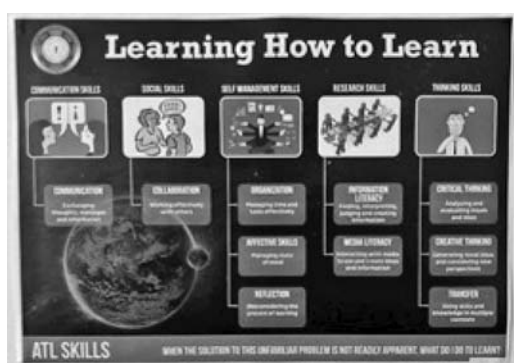


図2 学びの手法を示すポスター

3 理科のクラス

生徒たちは科学的な探究型プロジェクトの成果を論文として完成させる作業に取り掛か

っていた。ある男子生徒の様子を見てみると、かなりの長文をノート型 PC で書き上げており、科学記事や図書を適切に引用していた。教師から配布された評価基準の表を参照し、修正・加筆を進めているところだった。年齢を尋ねると 13 歳だと言うので、参考文献の引用方法と科学的な論文の書き方をいつ学んだのか確認すると、1 年前（12 歳の時）だと答えた。続けて、インターネット上には信頼できない記事なども存在するが、情報の信頼性を見極めるための知識・技能（情報リテラシー）は身につけたのかと尋ねると、「既に授業で議論したから大丈夫だと思います」と笑顔で説明してくれた。書き上げた論文と、調査や論文執筆のプロセスがどのように評価されるのかを理解しており（図 3 参照）、論文自

体には年齢相応の言語表現が散見されるものの、授業を通して学んだことが「個人で探究したこと」と有機的に結び付けられ、学術的に適切な方法で言語化されていた。中学校の段階であっても、教師の指導や支援によっては、学習の深化・高度化が十分に可能であることが確認できた。

4 NIS の教育の特徴

日本でのいわゆる 1 条校と呼ばれる学校は、明治以来の教育・学校を踏襲しているが、今回の訪問ではそれとは異なる探究型の授業形態があり、今後の日本の教育を考える上で大きな示唆を感じた次第である。まず、大半の学校で見られるような「教員が教える」・「板書をする」という光景は、皆無ではないが必要最小限であり（訪問時に参観した授業では皆無であった）、生徒たちは多くの授業時間を、個々のペースで学習を進めるために使用していた。ある時は生徒間で協力しながら課題に取り組み、ある時は批判的かつ建設的な議論を行い、お互いの成長のために切磋琢磨する姿があった。授業の全てが探究的な内容で進められており、「黒板を背にして教卓を中心に生徒が個々に前を向いて教師の説明と発問を受け、板書をノートにうつす一斉指導の光景は博物館に入っている」（佐藤，2012:10）との指摘そのものであった。教師は、生徒の学びのファシリテーター、あるいはサポーターの役割に徹し、個々のニーズに即した助言や指導を行っていた。

教室の機材としては、短焦点プロジェクターとその両側のスピーカーが印象的であっ

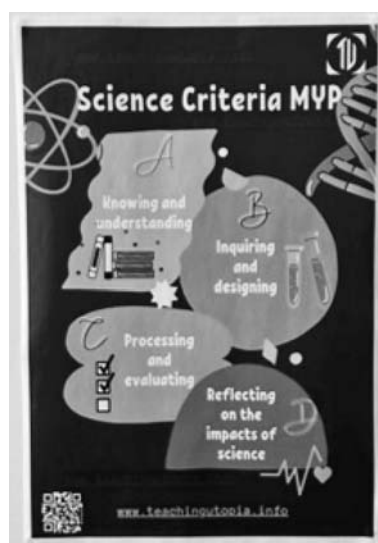


図 3 MYP の科学教育で重視される評価基準

た。一時、日本でも導入が進んだ電子黒板ではなく、短焦点プロジェクターの利点である「ホワイトボードに投影し、マーカーペンで書き込みができる」ものが導入されていた。これは、今後の日本でも選択されるべき機材であろう。教室から教室へと生徒が移動する際、必ず PC やタブレットなどの端末を持って移動しており、日本においても今後 GIGA スクール構想による授業での端末使用が増えてくればこのような光景になっていくのだろう。

IV 最後に

NIS の教育は、当然ではあるが、日々指導を行う教員の資質・能力によって支えられている。しかし、目に見える教育実践の背景に、組織的な教育目標の実現に向けて各教科の授業設計から評価の実践までをサポートし、教育課程を適宜俯瞰しながら総括的にマネジメントする教員（プログラム・コーディネーター）の尽力があることに注目したい。コーディネーターは、教育課程ごと（初等教育プログラム、中等教育プログラム、及びディプロマ・プログラム）に配置され、各授業の単元内容と到達目標の整合性や、授業内容に合った評価方法の選択などの面で教員をサポートし、それぞれの教員の個性を活かしつつも学校全体として一貫した教育実践と公正な評価が行われるよう努めている。学校教育のあり方を考える上で、保護者の存在も無視することはできない。NIS の PTA は、3つの機能を果たしている。①外部への学校紹介、②入学前の子供へのサポート、③在籍する生徒へのサポート、である。NIS の教職員は、PTA の活動が実を結ぶように保護者との密な連携を心がけている。教職員と保護者が、生徒とともによりよい学校を創ろうとする意欲が感じられる。

新学習指導要領の全面実施に伴い、高等学校では探究型学習に焦点化した科目が設置され教科横断型の教育・評価のあり方が議論され始めた。NIS のコーディネーターに該当するような教員の養成と活用が鍵になるのかもしれない。筆者の一人（滋野）は、訪問調査の翌日に大学コンソーシアム京都のフォーラムに参加し、探究活動において実績のある兵庫県立村岡高等学校の教頭と情報交換を行った。その際、NIS のスタッフが村岡高校に赴いて探究活動の情報収集を実施したとの話を聞き、地域貢献を掲げる NIS が今後どのように教育活動に生かしていくのか、ぜひ注視したいと考えた。また、オルソン・キクチ氏とグッドマン氏との懇談の中で、NIS の生徒の中に日本国内の大学進学を希望する生徒がいるものの、入試制度の問題や教育を英語で受けられないなどの理由から断念している実態が明らかになった。大学入試改革の動向や英語のみで単位修得が可能な大学教育について

ての情報交換など、今後は、インターナショナル・スクールと本学との接続・連携の可能性についてさらに議論を進めていければと考えている。

【引用文献】

佐藤学（2012）『学校を改革する』岩波ブックレット（No.842）